

七転び，八起き 一教職大学院での学びを現場で活かす一

その3 教育現場に戻って 「学びを通して見えてきたもの」

この4月に現場に復帰し，気が付けばすでに9月末，もう半年が過ぎようとしています。

前回お話した3つの出会いを通して，私自身多くのことを学び，新たな視点を獲得しながら自身の教師としての視野を広げることができました。ただ，見るとやるでは大違い。正直な話，現場に戻ってみると，新天地での現場復帰ということもあってか，目の前の職務に日々忙殺されている自分がいました。なかなかやりたいと思っていたことができなかつたり，思っているように進めることができなかつたり，理想と現実の間に潜む溝を新ためて実感する日々が続いているところです。しかし，そうした中にいるからこそ大学院での学びが今の私の支えとなっていると感じています。それは，大学院での学びの中で学び続けることの本質を垣間見ることができたことが大きいように感じています。

第1回で述べたように，私は教師としての自覚を大切にしてきました。その中で「学び続ける教師」を目指し日々の職務にあたってきましたが，学ぶとは何か，自分なりに学んでいるつもりでもそれが本当に学びになっているのかという疑問もありました。その中で，第2回で述べた3つの出会いを通してそれがどういうことなのかが明確になってきました。様々な理論や知識がどのように紡ぎだされ，蓄積されてきたかを知ることができ，学びを深めていくために必要なことが何か少しずつ見えてきました。あわせて，現場の中でそうした学びを活かしていくためには個人の努力だけでは限界があり，同僚，子供たち，地域や家庭など多くの人たちとつながりを構築し，それらを活かした活動を推進できる組織の重要性や必要性をより実感するようになりました。

Korthagen (2001 武田監訳 2010) は，教師の専門性の発達において成長し続ける能力を身に付けることの重要性を指摘しています。その中で，「自律的に学ぶ人というのは，自分自身の発達の方向性を決め，客観的に自身の発達をとらえられる人を指します。そしてそのために，他の人と協働することです。」と述べています。

このことをヒントとしながら，私自身の学びの在り方を常に更新していきたいと感じています。そして，目の前の子供たち一人ひとりが自己の成長や学ぶ楽しさ，重要性を実感しながら，自分の人生を充実したものにしていけるように手助けしていきたいと考えています。そのために，私は組織全体をまきこみながら，誰もが学び続けていけるような環境を醸成できるように私にできることをまずは実践していかなければと強く感じている所です。

引用文献

Korthagen, F. (Ed.). (2001). *Linking practice and theory: the pedagogy of realistic teacher education*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
(コルトハーヘン, F. 武田 信子 (監訳) (2010). 教師教育学——理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ—— 学文社)

(福島県喜多方市立第二中学校 吉村憲治)